

# 知立 弘法さんかわら版

発行編集部

五月です。かわら版をよろしくお願ひします。

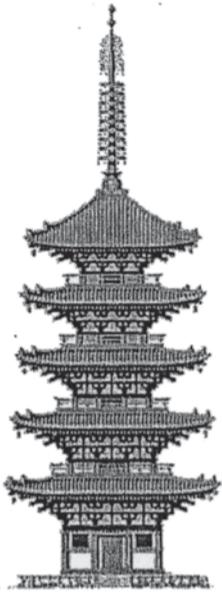
二〇二二年から「尾張名古屋・歴史街道を行く」杜都城郭・幕末史「」をお送りしていますが、今年には名古屋城下町を起点に広がる脇街道についてお伝えします。今月は木曾街道(上街道)に絡んで小牧山城と織豊系城郭です。

## ★小牧山城と信長の人心掌握術

枇杷島橋から岩倉街道を北上すると、やがて東の方向に小牧山が見えてきます。頂上から四方が見渡せることから、戦国時代に重要な拠点となった理由がよくわかります。

一五六〇年の桶狭間の戦いに勝利した織田信長は、一五六二年に徳川家康と清洲城において清洲同盟を結びます。

東側の徳川方との緊張が緩和されたことから美濃攻めの準備に入り、尾張北部の小牧山に拠点を前進させることを計画。丹羽長秀を奉行とし



て山頂に城が築かれ、一五六三年に兵力を清洲から移動しました。

清洲から小牧に移る際の興味深い逸話が伝わります。

長い間慣れ親しんだ清洲から拠点を移すことに家臣が反対しました。

信長は一計を案じ、小牧山よりさらに北の二ノ宮山(犬山本宮山)への移転を布告します。家中が騒然とするのを見計らい、信長は「家中の意見を吟味して二ノ宮山を断念し、清洲城に近い小牧山に変更する」と告げると、反対意見はほとんど出なかつたそうです。信長の人心掌握術の一端が伺えます。

## ★小牧長久手の戦いと小牧山城

小牧山の南側から西側に清洲から移転させた城下町が形成されました。信長は小牧山城から美濃への侵攻と調略を繰り返し、一五六七年、美濃斎藤氏の稲葉山城を陥落させます。

信長は小牧山城から稲葉山城(後の岐阜城)に拠点を移し、城下町も移転しました。小牧山城はわずか4年で廃城となり、城下町も衰退しました。

しかし、それから十七年後、小牧山城は再び歴史の表舞台に登場します。小牧長久手の戦いです。

一五八四年、羽柴秀吉と徳川家康

が争った小牧長久手の戦いでは、家康がいち早く小牧山に目を付けて本陣を置き、遅れてきた秀吉を悔しがらせました。

家康は信長の築いた城郭に大規模な改修を施し、山全体を土塁と堀で囲み、要所に防衛用の虎口を設けました。小牧山には織田信雄・徳川家康連合軍の本陣が置かれ、犬山城の豊臣秀吉と対峙しました。

秀吉軍は容易に手が出せず、池田恒興や森長可が三河に進軍して家康軍を誘き出す作戦を敢行しましたが、逆に長久手で敗れました。堅牢な小牧山城は徳川方勝利の遠因です。日本外史において頼山陽は「家康公の天下を取るは大坂にあらずして関ヶ原にあり、関ヶ原にあらずして小牧にあり」と記しています。

江戸幕府は小牧山を「御勝利御開運の御陣跡」として入山を禁止。麓に館を設け、小牧御殿と名づけました。小牧山と御殿は江戸時代を通じて尾張徳川家に保護されました。

一六二三年、藩祖義直が名古屋と中山道を結ぶ上街道(木曾街道)を小牧山の東に整備し、町も小牧山から東へ移転させて街道沿いの宿場町とし、小牧代官所を置きました。小牧宿は中山道、木曾路に向かう宿場として賑わいます。

## ★織豊系城郭

長い間、小牧山城は美濃攻略のための急造砦と思われてきましたが、実は主郭の四方を三重の石垣で囲んだ本格的な城でした。

南山麓から頂上本丸に向かう大手道中腹にも防衛のための屈折道が造

られ、両側は削平して数多くの曲輪を構築しました。後の安土城の縄張りと同じです。

近世城郭は織田信長が完成し、豊臣秀吉が全国に普及させたと言われ、織豊系城郭(しょくほうけいじょうかく)と呼ばれます。原点は安土城ではなく小牧山城です。

清洲城は水堀で囲まれた平城でしたが、山頂に天守を築き、中腹と麓に曲輪や堀を設ける小牧山城、岐阜城、安土城へと発展していきました。

小牧山城での取り組みは、岐阜城、安土城と進化し、安土城で近世城郭の完成を見ました。城の中心部には石垣上に天守を擁する本丸を築き、城内には城主の居館である御殿を設けました。

本能寺の変で織田信長が亡くなる、その後は豊臣秀吉が大坂城や朝鮮出兵のための名護屋城などを天下普請によって築きます。小牧山城も多くの家臣を動員して築城させており、秀吉、家康の天下普請も信長を真似たのかもしれない。

織田信長によって完成され、豊臣秀吉によって普及・発展した城のことを織豊系城郭と言います。

そして、小牧山城及び小牧山の城下町は、全国の城郭・城下町の嚆矢(こうし)と言われます。嚆矢とは「ものごとの始まり」「最初」という意味です。

## ★上街道(木曾街道)と下街道(善光寺街道)

来月は上街道と下街道についてお伝えします。乞ご期待。



# 知立 耕平さんかわら版

発行編集部

大塚耕平事務所

☎052-757-1955

Kouhei@oh-kouhei.org



皆さん、こんにちは。春から初夏に向かう季節ですが、朝晩は寒い日もあります。くれぐれもご自愛ください。

かわら版では日常会話の中に含まれている仏教用語を紹介しています。知らず知らずのうちに使っている仏教用語。それだけ日本人の生活に溶け込んでいるということですね。

プロ野球も開幕しましたが、早々に優勝戦線から脱落するチームのファンには何とも淋しいシーズンになります。「脱落」は文字通り「脱(ぬ)け落ちること」ですが、この「脱落」も仏教用語です。

仏教、とりわけ禅宗では「あらゆる自我意識を捨ててしまふこと」を意味する「身心脱落(しんじんだつらく)」という言葉があります。宗に渡って修行していた道元は、この言葉で覚りを開いたといえます。

宗に留学中の道元の先生(お師匠様)は如浄(によじょう)という高僧でした。道元は修行の末に自我意識が自分のからだから離脱した感覚を得たことを報告したところ、如浄師は「身心脱落、身心脱落」と言って、道元が覚りを開いたことを認めたと伝わります。

日本に帰国後、道元は自著「正法眼蔵」に次のように記しました。曰く「仏道をならふといふは、自己をならふなり。自己をならふといふは、自己をわするるなり。自己をわするるといふは、萬法に証せらるるなり。萬法に証せらるるといふは、自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり。」

意識すれば次のようになります。「仏道修行は『自分とは何者か』を明らかにすることであり、それは自我意識を捨てることであり、それによって自分も他者も一体であることを覚ることである」というような感じですね。

日常会話的には「身心(しんしん)」と濁らないで「心的(しん)」という順で書くのが一般的ですが、道元の「身心(しんじん)」は「し」が濁るうえに「身」「心」の順に書きます。

平安時代中期の仏教説話集「三宝絵」には漢字表記として「心身」も「身心」も両方登場します。この「心身」「身心」の使い分けはなかなか難しいですね。

近年になって、如浄は実は「心塵脱落」と言ったのでは

ないかという説も出てきました。中国語の「身心」も「心塵」も発音が似ているので、道元が聞き違えたという説です。

たしかに、お釈迦様の教えとしては「修行によって心の塵(ちり)を払い落とす」ということは理に適っていますので、「心塵脱落」でも意味は通じます。

「身心」「心身」「心塵」のいずれであったとしても、修行によって心の塵を払い落とし、自分という存在は大自然の中の一部であり、自我意識は自分の思い込みに過ぎず、自分であると思っているものから身(からだ)と心(精神)を取り除いたあとに残るものが人間の本質であるという、お釈迦様の教えを覚ったのが道元です。

では、どうやって「身心脱落」するか、どうやってその境地に至るか、という修行方法のひとつが「只管打坐(しかんたざ)」（ただひたすら坐禅すること）です。只管打坐により、「身心脱落」させ、心の塵を払いたいものですね。ではまた来月。

※



## お知らせ

今年、令和7年1月から、「手配り」は縮小しました。

「山門」にかかわら版を入れた台を置きますので、ご自由にお取りください。

ご協力、よろしくお願いいたします。

かわら版編集部：  
大塚耕平事務所 TEL 052 757 1955



※ 次回の「弘法さん」縁日は令和7年5月18日(日)です。